
変態女と俺

広瀬コウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

変態女と俺

【Nコード】

N3514F

【作者名】

広瀬コウ

【あらすじ】

アパートの自室の前で拾った変態女（自称・天才エロ漫画家）と、どこにでもいるごく普通の男。こんな2人のドタバタラブコメディ。たぶん純愛？

エピソード1 彼女を退ける（前書き）

つたない文章ですが、どうか最後までお付き合い下さい。

エピソード1 彼女を退ける

幼い頃、理由はわからないけれど、泣いていた自分がいた。たぶん学校の帰り道。みっともなく1人でメソメソと泣きながら歩いていた。

「コラッ！！男の子がそんなに泣くもんじゃないよ！」

容赦なく小学生の背中を叩いて、男らしい笑顔を向ける女の人。中学生だろうか。セーラー服を着ている。

僕は、顔を背けて目をそらした。

「泣いてないよ！」

「おやゝ？さっきまでずっとメソメソしてたくせにー」

「してないよ！もうあっち行けよ！」

なんでこんな知らない女の人にこんなことを言われなきゃなんないんだ。

幼心に僕は腹が立ってきて、走って逃げようとする、女の人に腕をがしっと掴まれてしまった。

気がつく、僕の手の中には迷彩柄のリストバンドが握られていた。

「それあげるから、もう泣くな。それさ、大きくなったら腕にはめてみてよ」

なぜそのとき、そんなに嬉しかったのかわからない。

ただ、握らされたリストバンドと、それからあの女の人の笑顔が

すごく印象的で、幼い僕の心は一気に惹きつけられてしまった。

.....

「――・・・まどかあ・・・まどか円！起きろよ」

まどろむ意識の中、俺はゆっくりと目を開けて自分がどこにいるのかを考える。

ああ、そうだ。サークルの飲み会だったんだ。先輩に飲まされて、俺も調子に乗って飲みすぎて・・・いつのまにか寝てしまったらしい。

「すみません、俺寝ちゃったみたいで」

「お前寝すぎ。もう11時まわってっぞ」

先輩は俺の額をデコピンしたが、酔った今の状態では地味に痛い。くらくらする頭を押さえながら、ようやく周囲の様子がさっきまでと違うことに気づいた。

「あれ？他のみんなは？」

「終電なくなるから帰るとよ。円はどうする？そろそろお開きにしようかと思ってんだけど、サ室に泊まりたいんだったら泊まってもいいし」

「ああ・・・帰ります。明日も授業あるし」

ぼんやりとしながらようやく外に出てみると、外は雨が降っていることに気づいた。

傘を持ってこなかったことを後悔しながら、まあ濡れるのもいいかと思い、近くに停めてあった自転車を引く。

大学から自転車で10分。そこに俺の下宿先がある。

それにしても驚いた。今の今まで思い出すこともなかった記憶をなぜ夢で見たのだろうか。それもリアルに。

あのリストバンドは今の下宿先に引越すときに持ってきたことは覚えていてる。

どこに閉まったっけか？

ザー・・・

雨が強くなってきた。だんだん視界もきかなくなってきた。

アパートの前にある自転車置き場に自転車を停めて、エレベーターで5階へと上がっていく。

たぶん俺は酔っていたけれど、普通に自分の部屋に入ってそのままベッドに入るつもりでいた。

——彼女を見つけるまでは。

「は・・・？」

一瞬、目の前の出来事が信じられなかった。

なんで俺の部屋のドアの前に、女がもたれて寝てるんだろうか。これじゃドアが開けられないし。

後で思うともっと別のことを考えるべきだったんだろうが、そのときの俺はそんなふうには考えられなくて、仕方なくその女をずるずるとその場から退けた。

・・・

で、朝起きた俺はやっぱり混乱することになる。

まず、1人で暮らしているはずなのに、掃除機の声で起こされたからだ。

「ほら！起きた起きた！いつまで寝てんのさ！」

「んゝ・・・もちよつと・・・」

寝ぼけていた俺は子供のようない方で答えるが、すぐにその違和感に気づいた。

・・・誰だ？

顔を上げると、掃除機を持った誰かとまともに目が合うことになる。

どこかで見たことがあるような顔。それが昨日家の前で寝ていた女の人だと気づいたとき、彼女はにっこりと笑った。

エピソード1 彼女を退ける（後書き）

改めまして、はじめまして。広瀬コウです。

これは、面白く、少し切ない話にしたいと思っています。
よろしく願います。

エピソード2 彼女の仕事

昨日の酒のせいで虚ろだった記憶が、徐々に俺の頭の中に蘇ってきた。

昨夜、家に帰ったら、玄関のドアの前で寝てる変な女がいた。こんな所で寝られたらドア開けないよと思いながら、彼女を退かして中に入ったところまでは覚えてる。
それからどうした？

「ねえ」

目の前にいる女が突然声を出した。

俺は思わずぎくつとしたが、無言で女を見上げる。結構綺麗な人だと思った。

「昨日のこと、覚えてる？」

「なんとなくは・・・あんたが俺んちの前で寝てたことか・・・」

「その後だよ。私に何したか覚えてる？」

さっぱり覚えていない。なんとなく彼女を家の中に入れたような気もするが、絶対何もしていない、と思う。いや、きっと・・・たぶん。

——俺なんかしたのか！？

「えええっ！？俺なんもしてないですよね！？」

「・・・とりあえず、しばらくここに置いてくればいいよ」
「なに言ってるんですか・・・なんで見ず知らずの他人を・・・」

「あれ？そんなこと言っているのかな？」

髪を横で1つに縛った女の方は、顔はあいかわらず笑顔だったが、その奥底にろくでもないことを考えていることくらい俺にだってわかる。

昨日のことを他人にバラされなくなかったら、しばらく家にいさせろとか言うに決まってる。

絶対ごめんだ。

「とにかく、俺はなにもしないですから！そんなことで脅されたって知りませんから！」

「うん、なにもしてないよ？君は私をエロ本の積んであったソファの上に寝かせてくれただけみたいだから」

はっとして慌ててリビングを見渡すと、確かに・・・男の・・・バイブルが・・・不用意に・・・ソファに・・・・・・げっ！

1人暮らしだったから、そこらへんにほったらかしにしてたらしい。

「見たんですか！？」

「だって見てくださいって言うようなもんだし、私そういうの興味あるもん」

なんだこの人。ただの変態か・・・？

「だからさ、ここの家賃半分払うから、しばらくいさせてほしいって言うてんの。昨日ここに来たのは野暮用やばようがあつたからなの。それが終わるまでここにいさせてよ。お願いだから。迷惑はかけないから」

反抗する気も起きなかった。なんたって彼女は、俺がなにか言う前にすでにここに居座ることを決めていたらしく、どこからか持ってきていたキャリアケースから荷物を取り出していたのだ。

そのときの俺は、すぐに出て行くものだと思っていたから深く考えていなかったが、それが彼女―足立詩織あたちしおり―との同居生活の始まりだった。

・・・・・・・・・・

だけど、足立さんはなかなか出て行かなかった。それどころか、しばらく居座るつもりらしく、どこからか自分の荷物を送ってもらっている。どうやらここでしばらく生活する気にいるらしい。

「おかえりなさい！」

大学の授業から帰ってくると、なぜかふりふりのエプロンを着けた足立さんが出迎えてくれた。

俺はそのなかなかのかわいさにノックアウトさせられないように目をそらした。

「・・・その、なんでそんな格好を・・・」

「新妻プレイ。置いてもらってるお礼だよ。私もそろそろ仕事しごと始めないといけないから、今のうちにこういう格好して、飢えている健康男児を癒してあげないとね」

「仕事・・・？」

そんな話は聞いてない。俺は怪訝けげんに思って首を傾げるが、彼女はこともなげにこくと頷いて1枚の紙を差し出してきた。

それを見て、俺は自分の中からなにかが噴き出しそうになるのを感じた。

「まだ言っていなかったっけ？ 私、天才漫画家なの。アダルトだね」

女の素っ裸の絵をひらひらとなびかせながら、彼女はにっこりと笑って言った。

エピソード2 彼女の仕事（後書き）

もしよかったら、感想お願いします。

エピソード3 俺はどうなるんだろう

なにを間違えたのか、俺は今同居人の仕事の手伝いをしている。その仕事とは、アダルト漫画のトーンを貼ること。

俺は一体なにをやってるんだろうか。

「コラー！弟子ー、手を休めるなー！」

「……だって、これエロすぎですよ……」

同居人こと、足立さんの怒声を浴びるが、俺は目の前の原稿だけでもう頭がクラクラとしてきていた。

しかも、なぜか俺に回される原稿は男女の恋愛度数が高かったりする。

「そんなことないよ。この天才・白雪マリアにしたらまだまだこれからってとこよ」

白雪マリア、それがペンネームらしい。

そもそも俺がこんなことをしている原因は実は1時間前にある。

………

足立さんがアダルト系の漫画家だと知ったその直後、なぜか俺の家に見知らぬ女が泣きながら入ってきた。それも鍵を閉めたはずなのに、なぜか普通に玄関から、それも土足で入ってきている。

「先生ー！！」

「よっちゃん、よくここがわかったね」

「っーか、あんた誰！？」

それぞれがそれぞれにいろいろなことを言っているが、どうやら俺だけが無視されて会話が進んでいくらしい。

よっちゃんと呼ばれた、ショートカットの女は泣きながら足立さんにすがりつく。

「白雪先生の行く所なんて私にはすぐわかりますよ〜〜それより先生、次の締切まであと1週間ですよ!?! 大丈夫なんですか!?!」
「大丈夫、大丈夫。優秀な絵の助っ人を見つけたからね」

その言葉と同時に、くるりと足立さんがこっちを見て、俺はどきっというか、ぎくっとした。少し遅れて、よっちゃんも俺を見てくる。その涙が痛々しい。

嫌な予感がした。

「佐伯円君^{さへおほまへ}。名づけてえんちゃん」

「えんちゃんさん……!!」

「いや、あの……」

よっちゃんに手を掴まれて、俺はどうすることもできなくなった。その隙に、足立さんがそれとなく呟いた。

「私の通ってた大学の後輩なの。武内先生に絵の上手い学生はいないですか? って聞いたら、えんちゃんの名前が出たの」

「はぁ!? 俺聞いてないですよ?」

「だって今初めて言ったんだもん。武内先生に感謝しなくちゃね」

武内先生とは俺が1年生のときのゼミの先生で、俺がよく宿題忘れたりだとか、遅刻してきたりとかでお世話になったことがあった。その関係で、俺がちよっと美術が好きだということも知っていたり

する。

それがこんなことに悪用されるとは思ってもみなかった。

今、俺の手はよっちゃんによってしっかりと握られており、加えて彼女の泣きはらした顔を見ていよいよやばくなってきた。

「えんちゃんさん・・・どうか、どうか、先生のことよろしく願います!!」

「え、あ、いや・・・ちよつと・・・」

なにか言いかけたところで、足立さんによって肩をぽんと叩かれ、振り向くと彼女は黙ってこくんこくんと頷いている。もうあきらめろとか言っているようだが、その意味がわからない。

「まあまあえんちゃん。これ以上よっちゃんを悲しませないでよね」

・・・・・・・・・・

こうして今に到る。

「まさか足立さんが俺にこれを手伝わせるために乗り込んできたなんて知りませんでした」

「私が家賃の3分の2払うことでお互いの利害は一致してるじゃん。よろしく頼むよ、えんちゃん」

言いように利用しているの間違いじゃないだろうか。そもそも手伝ってしまったっている俺もどうかと思うが・・・・・・つくづく自分の性格を呪いながら、俺は次のシーンに貼るトーンを探してしまう。

「うーん・・・どうもこの相手役の男の子がしっくりこないなあ」

そう言って、イスの背もたれにもたれかかる足立さん。

俺は思わず顔を上げた。

「そういうこともあるんですか？」

「そりゃあるよ。いくら天才だからっていつもいつも描けるわけじゃないの」

「ふーん・・・」

特に気にすることもなく俺が答えると、足立さんは突然持っていたペンをぼしんと机に叩きつけて、唐突に立ち上がった。

「よし！決めた！えんちゃん、デートしよう！」

「はあ！？なんでですか!？」

「レディーに恥かかせるもんじゃないよ、さあ行くよ！」

これから俺、どうなるんだろう・・・

エピソード4 彼女とデート

年上の女の人とデートなんて初めてだから緊張していたが、足立さんの言ったデートの真の意味を知ってから、俺のこのデートに対する意気込みが変わった。

さっきからずっと駅前の噴水の周りに座り込み、ただ行き交う人を眺めているだけだった。

「——これって人間観察じゃないですか」

「そうだよ？ 行き詰ったときとかちょっと散歩しながら観察してる、いいアイデアが浮かんできたりするんだよね」

手にはしっかりとノートとペン。結構ちゃっかりとしている。

俺はというと、さっきから意味もなくただ行き急ぐ人たちを眺めているだけだ。だんだん俺を連れてきた意味があったのかわからなくなってきた。

「見て見て、えんちゃん。あのベスト来た男の人」

「ああ、あの人がどうかしたんすか？」

「5秒後にあの白いワンピースを着た人と抱き合う！」

なに言ってるんですかと言いそうになったとき、俺は目を疑うことになる。

まさに5秒後、そのベストを着たかっこいい男の人は、白いワンピースを来た女の人を抱きしめているのだ。こんな人通りの激しい中、人目もはばからず堂々と。しかし、すぐに離れてしまったので、2人が抱き合ったことに気づいたのは、近くにいた人たちと、ここで人間観察をしていた俺たちだけだろう。

「エスパー？」

「こんなの序の口だよ。たぶんあの2人は遠距離恋愛中で、久しぶりに再会したってところかな？」

まるで会話が聞こえているようだ。改めて俺はまじまじと足立さんを観察してしまった。

「なによ？私じゃなくて、他の人を観察しててよ」

「いや、足立さんって何者なのかなーって」

「だから天才漫画家。好きな本はエロ漫画。趣味は人間観察」

「よくわかりました。ただの変態なんだって」

ため息をつきながらまた目線を人通りに戻すと、視界に俺の知っている人間が映ったような気がした。慌てて目で追うと、人ごみの中、小柄な女の子が歩いている。

「すいません、俺ちょっと・・・！」

後先考えることなく、俺は足立さんを置いてその女の子を追っていった。

・・・・・・・・

「江崎さん」

その子の名前を呼ぶと、彼女は辺りをきよろきよろ見渡した後、ようやく俺のほうを見た。

人ごみに酔ったのか、少し顔が赤いが、俺を見つけるとすぐに顔をほころばせた。

「佐伯君！偶然だね」

「ほんとだね。見かけたから思わず声かけちゃった」

俺もにこにこ笑って答える。笑いながら、なにも考えなしに声をかけたことを後悔していた。話す話題がない。

「今からバイトなんだ。佐伯君は？」

「俺は・・・ちょっと友達の付き添いっていうか・・・」

「あ、わかった。彼女とデートなんでしょ」

今それを江崎さんに言われるのは結構ショックだった。

大学に入学したときから、俺はずっと江崎さんのことが好きだったのだ。だけど、奥手でなかなか話しかけられず、好きだと言えないまま結局2年生になった今でもずるずると引きずっている。

「バイトだからそろそろ行くね。また月曜日」

「うん。じゃあね」

「バイバイ」

結局なんのために話しかけたのかわからないまま、俺は足立さんのいる噴水の所まで戻った。彼女はさっきと同じようにただ座って人間観察をしているだけだ。

「片想いか・・・」

「・・・！！」

本当のことを言われ、俺はぎくっとなって足立さんを見る。彼女は俺のことを見ることなく、ただすらすらと言葉を放った。

「大学に入学したときから密かに好きだったんだけど、奥手な性格

が災いして上手く話しかけられずにずるずると今に到るってところかな」

「——ほんとにエスパーですか？」

「えんちゃんは筒抜けだもんなー・・・こんなの誰だってわかるよ」

俺は複雑に思いながら、足立さんより少し離れた所に座った。しかし、逆に彼女はがばつと立ち上がった。

目をきらきらとさせながら、俺のことを見てくる。

「えんちゃん！ちょっとつきあってよ！」

「はあ？どこにですか・・・？」

「大人しか行けないトコ」

なぜ足立さんが言うのと卑猥ひわいに聞こえるのだろうか。

とにかく、俺が答えるよりも先に彼女にぐいぐいと引っ張られてしまう。彼女の言う、大人しか行けない所へ——・・・

エピソード5 彼女とデート2

お洒落なバーの一角。

そこで繰り広げられるカップルの会話。

「本当に悪いと思ってる。ごめん」

「……あなたなんて最低だわ……もう二度と会いたくない・
・」

「本当にごめん——」

「もういいわ。別れましょう」

「——……」

パシーン（↑頬を叩く音）

「なんであなたたっていつもそうなのよ!! どうして肝心なときになにも言ってくれないのよ!」

「——すまない……」

そんな修羅場のような会話が繰り広げられる中、少し離れた所でノートにメモを取っている人間が1人。

それも、ほくほくと幸せそうな表情で。

「大漁、大漁……いいカンジ」

「……足立さんって、本当に変態ですよ。他人の修羅場シーンを聞いて嬉しそうにノートにメモ取ってるなんて」

「なに言ってるの。これも取材の1つなのよ」

しかも目の前にはカクテルがなぜかジョッキで置かれている。このマスターとは顔なじみだと言っていたが、ここまでいくとだんだんわからなくなってきた。

そもそも彼女を理解するほうが不可能かもしれない。

「大人しか来れないトコってバーのことだったんですか？」

「そうそう。それに、バーほど1人で来て寂しい所はないね。ここは男女で来なくっちゃ」

「もうマスターが顔なじみなら、そんなこと気にしなくてもいいんじゃないんですか？」

「マスターにはえんちゃんのこと『大人の相手』って伝えておいたから」

俺は場違いにも、飲んでいたものを一気に吐き出してしまった。隣で修羅場をしていたカップルが驚いて俺のことを見るが、今は構っている余裕などない。

「なんなんですか！そんな誤解を招くような言い方は！？」

「まあまあ、落ち着きなよ。えんちゃんの片想い相手には内緒にとくからさ」

本当にわからない！この人の考えてることが。

俺は目の前のグラスをぐびっと飲み干して、グラスを拭いているバーテンダーに声をかけた。

「あの人と同じもの、俺にもお願いします」

「アースクエイクでございますね。かしこまりました」

見ず知らずの修羅場カップルの男のほうで飲んでいたカクテルをパクリ、深々とため息をついた後、俺は足立さんを見た。

黙っていれば本当に綺麗な人なのに、なんだかもったいない。きっと学生時代はすごくモテていただろう。

「・・・アースクエイクはきついんじゃないかな」

ふと呟かれた言葉。俺にはよく聞こえなくて、バーテンダーから出されたものを飲んだとき、そのまま嘔き出しそうになるのを必死にこらえた。

少し飲んだだけでわかる。とてもアルコール度が高いということに。

っていうか、俺が火を嘔きそうなほど苦しんでいたのに、その隣でただ足立さんはゲラゲラと笑っているだけだった。

そんな俺たちを見て、隣にいたカップルが呟く。

「やっぱり・・・自分の気持ちには正直でいたい。俺は君以外考えられない。あんな下品な笑い方をする女の人を見て、やっぱり君以上に最高な人はいないって改めて気づいたよ」

「私もよ。あなたほどお酒が強くてすてきな男性はいないわ。大好きよ」

ひしつと抱き合うカップル。

その隣で火を嘔きそうな男と、それをゲラゲラと笑って見てる女。バーテンダーだけが静かにグラスを拭いていた。

・・・・・・

「予想外だ・・・まさかあの後あのカップルがヨリを戻すなんて。

この天才・白雪マリアの頭をもってしてもわからない・・・」

「っていうか、恥ずかしくありませんか？俺たち、バカにされたんですよ？」

初めてまともなページのベタ塗りを担当することになり、いつになく冷静な口調で俺は指摘する。

足立さんは俺を無視して下書きをしていく。

「今回の人間観察は奥が深かったけど、あんまり収穫はなかったかも。やっぱり今度レンタルショップで借りてこよ」

「なにをですか？」

俺は問いたですが、足立さんとはにかく俺を無視する。

・・・・・・嫌な予感がする。

エピソード6 俺の内心

昼ごはんを食べた後の3限の授業はとても眠い。

階段教室の後ろから見ているだけで、多くの人が寝ているのがわかった。もちろん俺もその1人となって昼寝をしていたが、ジーパンのポケットに入れたケータイが振動していることに気づいてのろのろと起き上がった。

着信あり。足立詩織からだった。

しかし、どうせたいしたことではないだろうと思って、俺はかけ直すことなくケータイを閉まった。

このときのことを、俺は後でものすごく後悔することになるのだが。

.....

「佐伯君、今日バイト？」

江崎さんから話しかけられたのは、授業が終わった直後だった。こんなことは初めてだったから、俺はこのチャンスに逃すまいと身構える。

「うん。もしレンタルしたいDVDがあったら俺に言ってよ。タダで借りれるんだ」

「ほんと？ 私今借りたいものがあるんだ。一緒に行ってもいい？」
「もちろん！ 来てよ」

ラッキー！ レンタルショップで働いててよかった・・・
江崎さんとともに話すことなんてめったにない。それなのに、

こないだは偶然駅前で会ったし、こんなふうに俺のバイト先に来てくれることだって初めてだ。

ひょっとしたら、足立さんが幸運を運んでくれたのか？

まだバイトの時間には早かったが、俺たちはバイト先のレンタルDVDショップへと向かった。

・・・・・・・・・・

店内はそんなに混んでいなくて、レジに立っていた店員もすぐに俺たちの存在に気づいた。

いつもはバイトの時間以外にここに来ることを避けていたが、今日はかわいい女の子を連れてるので鼻高々だった。

「なに借りるの？」

「邦画のねー・・・あ、あった。これこれ」

それは少し前に日本で公開された映画で、レンタル開始日からとても人気があったものだ。いつもは在庫がないのだが、今日あったのはたぶん本当にラッキーなんだろう。

「ラッキーだよ。これすごい人気で、もうないんですか？ってよくお客さんに訊かれる」

「ほんと？やったあ！これさ・・・・・・・・」

江崎さんがそのDVDについて嬉しそうに語りだしたから、俺も彼女の話を真剣に聞く。

だけど、なんとなく違和感を感じていた。

——そう、江崎さんのバックに見える18歳未満立ち入り禁止の、いわゆるアダルト系のDVDが置かれている場所から、見たことが

あるような格好をした女の人が出てくるのを視界の片隅に捉えたのだ。彼女はそのままレジに行く。

「あれっ？これ、佐伯のカードじゃないですか？」

「そうです。彼の代理で借りに来ました」

やけに大きく響く声。俺は江崎さんの話から完全にレジでのその会話に引きつけられてしまった。江崎さんも気づいてレジのほうを向いた。

それと同時に、俺はその女の人——足立さんが借りようとしているものがアダルト系のDVDであることに気づいた。

「江崎さん！こっちのDVDもオススメだよ！」

俺は平静を装って彼女をレジの死角に誘導させるが、内心ひやひやものだった。

なんたって、俺の代わりに借りたDVDがそういう路線のものであるということは、つまり、俺がこのDVDを借りたかったという話になるのだ。

こんなことを江崎さんに気づかれるわけにはいかない。

「あっ、やっぱりえんちゃんだ」

しかし、不運は続くものであり、レジから隠れたと思ったら足立さん本人がこっちに近づいてきたのだ。

「ダメだと思ったけどカード勝手に借りちゃった……って、ごめん。お邪魔だったかな」

「いえ……ってか、なんで俺のカード勝手に使ってますか。ダ

メですよ・・・」

俺は小声でぼそぼそと答えるが、すでに足立さんの興味は俺じゃなくて江崎さんに向いているようだ。そして、江崎さんもじっと足立さんを見ていた。

別に悪いことなんてしていないのに、なぜか俺の内心はひやひやものだった。

「こんにちは。えんちゃんの親戚の足立詩織です。いつもえんちゃんがお世話になってます」

「いいえ・・・同じ大学の江崎まゆです！よろしくお願いします」

お互いに自己紹介をする江崎さんと足立さん。

俺はその様子を見て、言いようのないものを感じた。なぜだろう、なんで今寂しさを感じたんだろう・・・

エピソード6 俺の内心（後書き）

ちなみに、レンタルカードの貸し借りは禁止行為です。
皆さんはやらないでください。

エピソード7 彼女は女王

「ごめんごめん！まさかえんちゃんがあそこでバイトしてて、女の子とデート中だったなんて思わなかったんだもん。電話でえんちゃんのカード借りていいか訊こうと思ったんだけど、出なかったし」
「それはもういいですけど・・・まさか本当に、その・・・例のDV借りたんじゃないですよね？」

「借りようと思ったんだけどいいのがなくってさー。結局やめたの」

俺はほっとしてため息をつく。まさかバイト先で、自分のカードを使ってAVを借りられたらたまったもんじゃない。

しかし、次の足立さんの一言で俺はまた焦ることになる。

「わざわざお金かけなくても、えんちゃんに頼めばただで借りてこられるってわかったし」

「嫌です！！それだけは勘弁してください！」

足立さんは俺をからかうようにして笑っている。その表情はともかわいくて、今日レンタルDVDショップで感じた言いような感情を思い出させた。

なんだったんだろう、あれは・・・

「さーて！今日徹夜で原稿完成させて、私も学校行かなきゃなあ」

その言葉に俺はふと疑問を感じた。

「学校って・・・足立さん何歳なんですか？もう大学は卒業したんですでしょ？」

「レディーに年齢を訊くなんて・・・えんちゃんデリカシーがない

よ。でもまあいいか、24歳のぴちぴちの大学院生だよーん」

「えっ！？ウチの大学院に行ってるんですか！？」

「そうだよ、言わなかったっけ？」

初耳だ。ひよつとしたら以前大学構内で見たことがあるのかもしれない。それを考えると少し新鮮な気持ちになった。

・・・・・・・・・・

翌朝、俺が目を覚ますとすでによっちゃんが来ていて、机に突っ伏して寝ている足立さんにタオルケットをかけているところだった。俺が近づくと、よっちゃんはこっちに気づいて小声で囁いた。

「おはようございます。朝から勝手にお邪魔してすいません」

「いえ・・・できたんですか？原稿」

「はい。先生がさっきまで徹夜して完成させたんです。今寝たばかりだからどうか起こさないでくださいね」

眠っている足立さんの横顔が見えた。変態じゃなかったらすごくモテるだろうに、大学院ではどのように思われているのだろうか。

その後、よっちゃんは朝イチで原稿を届けるためにすぐに出て行ってしまい、俺は自称・天才漫画家を起こさないように静かに朝食をとった。

・・・・・・・・・・

その日の昼、俺は食堂でいつも一緒に食べているサークルの友達を探すと、ちょうど金髪に近い髪の色をした頭が見えた。

誰から見てもちゃんい男だったが、俺はためらうことなく近づい

ていく。

「よー間宮」

「ういーす」

明るい髪の毛を割と長めに伸ばしているので、こういう系統の人間が苦手な人には近寄りがたいだろう。加えて、愛想笑いのしない男だからより一層孤立してしまう。

だけど、話してみると結構庶民的な男で、俺はそういうところが話しやすくて、たぶんサークルの中で1番つるんでいるのかもしれない。

「佐伯さ、年上の女と同棲してるって本当か？」

なんの前触れもない間宮の問いかけに俺は飲んでいたペットボトルのお茶を噴き出すかと思った。

誰にも言ったことがないのに、なんで知れているんだろうか……

「なっなんで……」

「いや、川田たちがそんなようなこと言ってたから……なんかお前んちから女が出てきたとか」

「はぁ……まあ、話せば長くなるんだけど——……」

ふと、そのときあることに気づいた。

「なんで年上だってわかるんだ？」

「だってあれだろ？ 噂の……ウチのサークルの女王」

「は……？ ごめん、なんの話かわかんない」

「知らねえの？ ウチのサークル、昔めっちゃ強い女がいたってこと。名づけて『ミステリーの女王』その人だろ？ 同棲してんの」

俺たちが所属するサークルはミステリー同好会。人数も少なく、そんなに活発なサークルではなかったが、それでも俺はこんなアツトホームなカンジが気に入っていた。

だけどもなんだ？ そんな空気に相応しくない女王って言葉は？

・
・
・
・
・
・
・

だけど、俺はそれを身をもって体験することになる。

俺たちはその後、川田がいるかもしれないサークル室に向かった。もちろん、ミステリーの女王についての話を聞きためたのだが・
・それをする前に、すでに本人が現れていた。

「よっ！ えんちゃん。まさかサークルの後輩だったとはね」

ミステリーの女王が・
・
・
・
・

エピソード8 彼女は人気者

その日、俺は信じられない光景を目の当たりにすることになる。

まず、今まで何気に憧れていた4年生の先輩たちが、女王の前で急にへーこらし始めたこと。本当に頭が上がらないみたいで、傍から見ると弱みでも握られているんじゃないかと心配になってきた。

それから、俺以外のすべてのサークルのメンバーが女王の存在を知っていたということ。

今や女王こと、足立詩織さんは4年生の先輩に囲まれてなにやら楽しそうに話している。

それを横目で見ながら、俺はサークル室の隅で1人ため息をついていた。

「ジジイみたいなため息だな」

振り返ると間宮がどこからかポテトチップスをパクってきたらしく、それを片手に俺のほうへ近寄ってきた。

渡されたポテチの袋を俺は素直に受け取る。

「・・・サンキュー」

「激辛わさび醤油味のポテチ。不評だったからかっぱらってきた」
「・・・ああ、そう」

もう少し早く言ってほしかった。すでに俺の口の中にはポテチが1枚放り込まれていて、間宮の言葉と同時にそのツンとした辛さが鼻にきていた。

間宮のほうは、辛さなんておかまいなしにぱりぱりと食べていく。こいつの口の中はどうなってるんだ？

「間宮さ、お前彼女とはどうなった？」

「彼女じゃねえし。ただの同級生だし、どうもなってねえよ」

とか本人は言っているが、間宮には少し地味な格好をした女の子の友達がいて、たぶん間宮は彼女のことを好きなんだと思う。

「すげーな、あの人」

「・・・女王のこと？」

「なんかいろいろ武勇伝聞いたけど、本当に女王って器だな。女王見てると周りにいる人がその下僕みたいなのに思えてくる」

「確かに・・・」

ここから見てても、サークルを引退したにも関わらず、ものすごい態度のかさだ。間宮の言うとおり、マジで女王だった。

だけど、そろそろ3限の授業が始まる。みんなそれぞれの教室に行かなければならないのに、女王に遠慮してなにも言えないでいることが俺にはわかった。

俺はため息をついて立ち上がった。

「足立さん、そろそろ次の授業が始まるんで・・・」

「そっか、そうだね。長いこと話しちゃってごめんね！」

「先輩！またぜひ来てください！！」

4年生の先輩たちに言われて、足立さんは笑顔でサークル室を後にしていく。

俺はすぐにみんなに謝ろうと思ったのだが、なぜかサークルのみ

んなに取り囲まれてしまった。

「円！お前、足立先輩と知り合いならもっと早く言えよ！」

「すいません！まさかこんな女王だったとは思わなくて・・・」

「足立先輩は俺たちの憧れだったんだからな！」

——？話がよく見えない。

その後、3限の授業中に間宮に話を訊いて、足立詩織という人間がとても人望が厚く、人気があったことを知った。

・・・・・・

バイトを終えて家に帰ると、時刻は11時近くになっていた。

なにも考えずにリビングの電気を点けると、朝と同じように机に突っ伏して寝ている足立さんの姿があった。

新しい原稿を描いている途中にまた眠ってしまったらしい。

俺は彼女の寝顔を見て、昼間間宮が言っていたことや、先輩が言っていたことを思い出した。

——人気がある

——誰からも好かれる

——憧れ

そんな人と一緒に暮らしてんだな。

ふと、そのとき思った。足立さんの野暮用ってなんだろうか？

ただ漫画の手伝いをさせるためにここに乗り込んできたというのは、少し強引なような気がする。そういえば、最初のときに言っていたはずだ。野暮用があるって。

ピンポン

玄関のチャイムの音で、俺は一旦思考を停止させる。

こんな時間に誰だよと思いつながらインターホンに出ると、聞き覚えのある声が聞こえてきた。

『電話もしないでごめん！ 今晚泊めてよ』

俺の姉ちゃんだった。

エピソード9 彼女の作り笑い

『会社の同僚と飲んでただけで、今日あんまり持ち合わせがなく
てさー・・・あんたんちが近いから泊めてもらえないかなーって思
ったんだけど、ダメかな?』

そんなことは以前にもあったから構わないのだが、今回は状況が
違う。なんたって俺の背後にはエロ漫画を描いている女が寝てい
るのだ。

そんなシーンを見たら姉はどんな反応をされるのか想像もできな
い。とにかくなんとか言い訳をすることにした。

「いや・・・あのさ、今彼女が来てて無理かも」

『そっかー・・・どうしよ』

「お金なら貸すから、それでタクシーかなんかで帰んなよ。ちょっ
と待ってて」

急いで財布を用意して中身確かめる。たぶん1万円もあれば足
りるはずだ。今月ちょっと厳しくなるが、バレるよりはマシだろう。
玄関のドアを開けると、顔の赤い姉がにこにこしながら立ってい
た。

「彼女ってどんな子よー?」

「あーもういいから。駅近いからそこでタクシーに乗れよ」

『やめてください! お代官様!』

『よいではないか、よいではないか』

『あーれー・・・』

俺と姉の会話のバックミュージックのように聞こえたそれは、いつの時代のものなのか、なんとなくどんなシーンなのかわかるものだった。

ひょっとして、足立さん起きたのか!?

どう言い訳しようか迷っているとき、気がつくと姉は目の前にはおらず、すでに部屋の中に入ってしまったていた。

「姉ちゃん!これには深い訳が・・・!」

慌てて言い訳しようとするが、もう遅い。

リビングでは足立さんが変な時代劇の映像を見ていて、傍では姉がその様子と、机の上に置いてあったエロ漫画の原稿を眺めていた。

やっべー!どうしよ・・・

そんなとき、姉がなにか呟いた。

「あ・・・あなたはもしかして・・・白雪マリアさんじゃ・・・」

「えっ、そうですけど・・・よくわかりましたね」

「そりゃあ、もう有名ですから!!」

このとき、こんな漫画みたいな展開に俺は1人ずっこけていた。

つくづく思うが、最近の俺の日常はありえないことばかりだ・・・

・・・

そうしてその数十分後には、なぜか俺の部屋は宴会のようになっていた。

もともと酔っていた女と、祭り好きな女が集まれば、こんなにも盛り上がるらしく、バイトで疲れた俺はだんだん頭が痛くなってきた。

た。

「でもさー、まさかウチの弟とデキてたなんて思いませんでしたよー」

「デキてないって。えんちゃんは私の弟子なんだってばー」

「またまたー」

お互いに酔ってしまってあんまり会話が成り立っていない。

まさか姉ちゃんが白雪マリアを知っているとは思わなかったが、話によると、高校のときにクラスで話題になった漫画があってその作者が足立さんだったそう。

「ウチの弟なんかで役に立ちますかー？」

「立つよ！すごい器用だもん。それにえんちゃんといると、今までのやなこと全部忘れられるような気がするしー」

俺はその言葉に少し興味を持った。

「それにしてもさー・・・結婚式の前日に逃げる男なんているかー？」

「ええー？そんな男最低ですよー！」

なんでもないような会話だが、聞き流すことができなかった。

結婚式の前日に逃げた男。きっと、本当にあった話なんだ・・・

・・・

「えんちゃん！ベランダにパンツ落ちてたよ！」

「そんなこと大声で言わないでください」

俺は深くため息をつきながら、足立さんから自分のパンツを受け取る。

あれから1週間。足立さんと姉の宴会騒ぎのことは本人たちはほとんど忘れていて、結局あの話もうやむやになってしまった。

「えんちゃん、なんか変だよ。どうしたの？」

「なんでもないっすよ。足立さんに変だって言われたらもう俺も終わりだ」

「なんだとー！」

後ろでぶーぶーごねる彼女を置いて、俺は玄関へと向かう。これから授業だ。

そのとき、足立さんも俺の隣に座り込んでなぜかパンプスを履く。珍しくどこか出かけるらしい。

「人間観察にでも行くんですか？」

「ううん。ちょっと人と会う約束があつてさ」

「ふーん・・・」

何気なく相槌を返したが、先に立ち上がった足立さんの表情を見て、俺は全ての思考が一瞬停止するのを感じた。

たぶん、今まで見たこともないと思う。足立さんの無理やり笑った笑顔を。

「じゃあ、いってきます」

たったそれだけ残して、足立さんは俺の前から姿を消した。

エピソード9 彼女の作り笑い（後書き）

毎日更新してきましたが、

明日と明後日で大学の学園祭があるためサークル活動をしてきます。
遅くなったらごめんなさい；

エピソード10 俺の気持ち

嫌な予感がする・・・

昔からこういうカンはよく働いて、たいていその後ロクなことがなかった。

だから、今回もそうなるかもしれない。本当にそんな気がするんだ。

「佐伯君・・・・・・・・佐伯君！」

その声に反応して、俺はようやく自分がどこにいるのか理解した。普段からたいして聞いてもない授業の真っ最中だ。

顔を上げると俺の前の席に座っていた江崎さんが心配そうに俺の顔を覗き込んでいる。

「どうしたの？なんかずっと怖い顔してたよ・・・？」

「や、なんでもないよ。昨日あんまり寝れなくてさ」

俺は無理やりに笑ってごまかす。ふと、足立さんも今朝こんなふうに笑ってたなと思い出して、またどくどくと血管がうずいてきた。ああ、畜生！なんでこんなにあの人のことが気になるんだよ――！

なにも言わずに立ち上がると、隣に座っていた間宮がさすがに顔を上げる。

「サボリ？」

「ちよっと気になる。あとよろしく」

江崎さんがこっちを見てきたのがわかったが、今は振り返る余裕

さえなかった。

.....

アパートに戻ると、そこにはなぜかよっちゃんの姿があった。ちなみに俺は彼女の本名を知らないので一瞬呼び方に迷ったが、そのまま呼ぶこととした。

「よっちゃん！」

「え、えんちゃん・・・！授業はどうしたんですか！？」

「抜けてきました。それより、足立さんはいますか？ちょっと用があつてきたんです——」

そこまで言つて、俺はようやくその違和感に気づいた。

俺の家の中——もともと少なかった足立さんの荷物が運び出されていることに・・・・・・

「・・・・・・どういふことですか？」

静かに言い放つと、よっちゃんは小さな体をさらに縮めてしまった。

「・・・先生はこないだ描き上げた原稿を最後に漫画家をお辞めになりました・・・もうここには戻ってきません」

「なんで・・・そんなことになったんですか！？」

「先生のお母様が再婚するはずだった男の人と別れてしまったことが原因なんです・・・自分が官能系の漫画家だからだと、先生は自分をお責めになつて・・・」

てっきり足立さん自身が婚約者に逃げられたんだと思っていたが、

それでも彼女にとって悲しいことに変わりはないだろう。
俺は再びよっちゃんを見た。

「足立さんは・・・どこへ？」
「・・・・・・・・わかりません」

それでも、俺は駆け出さずにはいられなかった。例え居場所がわからなくても、捜していればドラマのようにまた会えるような気がしていたんだ。

ずっと捜し続けた。日が暮れても、日付が変わっても。
ずっと、ずっと――

だけど、俺が足立さんと会うことはなかった・・・・・・・・

・・・・・・・・

足立さんがいなくなった穴は大きかった。

部屋の中はこんなに広かったのか疑いたくなるほどだったし、静かすぎた。

いつのまにか季節は冬になろうとしていた。

「えんちゃん」

「――っ!!」

思わず反応して振り返ったが、足立さんではなかった。彼女の呼び方を真似した間宮が無表情でそこに立っているだけだった。

俺は急に恥ずかしくなってしまった。

「なんだよ・・・」

「別に。そういや、こんな呼ばれ方してたなって思ってた」

間宮はそのまま俺の横を通り過ぎる。俺は黙って後をついていく。

秋の空気は寒い。ただでさえ嫌いな季節なのに、いろいろなことが重なって余計に寂しくなる。

なんだろう。もともと野暮用が終わったら出て行くって約束だったはずだ。なのに、俺はなんでこんなに寂しくならなきゃなんないんだ？

あんな変態女、どこへ行ったら俺には関係ないのに・・・

あ、わかった。たぶん俺は――

「間宮・・・」

「ん？」

「俺、足立さんのこと、好きだ」

「うん」

以前感じたもやもやの正体を俺は初めて知った。

エピソード11 駆け出す俺

俺が足立さんへの気持ちを自覚したところで、結局彼女に会えるわけではなかった。

あいかわらず時間だけが俺を追い越していき、俺という人間は全然前に進めないでいる。

12月24日。俺はあてもなく買い物に出かけた。

町はクリスマス一色。よく聞く音楽、『きよしこの夜』が流れている。

俺はその中を、マフラーに顔をうずめながら歩き続けた。

ふと、バイト先の前を通りかかったので入ってみると、1度だけ足立さんがAVを見に来たときにレジにいた男がいた。

「あつれー？ 佐伯じゃん」

「よー。暇だから遊びに来たよ」

「なんだお前。そんなに寂しい人生送ってんのかよ」

お前もバイトをしている時点で同じだけだな、と俺は思ったが、その男——高橋はけらけら笑っているだけだから心の中に留めておくことにした。

適当に店内を見て回ろうと思ったとき、何かを思い出したように高橋が呟く。

「そういや、こないだお前の美人な親戚さん来たぜ？」

「は・・・親戚？」

何気なく聞き返してから、俺は思考が停止するのを感じた。

親戚？それってまさか・・・！

「足立さんがここに来たのか！？」

「あ？足立さんだっけ？ああ、お前のカード使ってDVD借りた人だよ」

「なんで！？いつ！？」

「月曜日だから・・・一昨日？」

さすがに俺の様子がおかしいと思ったのか、高橋が訝しげな表情で首を傾げる。

だけど、そんなことを気にしている場合ではなかった。足立さんがここに来たという事実に関頭の中を整理しきれずにいたのだ。

「どうしたんだよ・・・？」

「や、なんでもない。それより、そのとき足立さん何か言ってなかった？」

「えんちゃん元気？とか訊いてきた」

「それで？」

「別に・・・元気なんじゃないですかって答えたら、それならよかったって言っただけで・・・って、なんで俺がこんな伝言板みたいなことしてんだよ。親戚なんだから直接話せばいいだろ」

俺は困ったように笑って言った。

「親戚じゃない。俺の好きな人」

高橋は特別驚いた素振りを見せることなく、ただふーんと頷いただけだった。

「じゃあ、今日はその好きな人、一緒じゃないんだ？」

「ずいぶん前から行方不明でさ、どこにいるのかさっぱりわかんねえ」

「は？わかるだろ。住所あるんだから」

「住所？それがわかったら苦労はしないよ」

「こないだ来たとき、カード作ってっただよ。そのときに住所書いてもらったから、それ見ればわかるんじゃない？」

意外な言葉に俺はただ目を丸くするだけだった。

高橋は個人情報情報の詰まったパソコンを起動させ、俺にその中の1つを見せてくれた。

確かに見える。足立詩織、それから住所、電話番号もそこには書いてある。

「――長野・・・が住所みたいだな。佐伯、これから行ってこればいいんでない？」

ここから長野までどのくらいかかると思ってたんだよ。だけど、行くんだろうな。会いたいし。

俺はこくと頷いて彼女の住所をメモした。

それが例えば偽りのものでなければ、必ず会えるような気がしていた。

「サンキュー・・・高橋」

「礼なら間宮に言えよ。あいつに言われなかったら、たぶんこうならなかったし」

「・・・？」

「とにかく行けよ。その住所が本当だといいけどな」

よくわからないけど、言われたとおり店を出た。

一旦家に帰ってから用意して、それから電車で長野に向かおう。

それで、会ったら絶対文句言ってやる。
そう決心して俺は駆け出した。

エピソード11 駆け出す俺（後書き）

大学祭が終わり、ようやく復活です。
また読んでいただけると嬉しく思います。

エピソード12 俺の告白

新幹線、電車を乗り継ぎ、ようやく長野県にたどり着いた。俺は住所だけを頼りにタクシーに乗ってその場所へと向かう。

「ここ・・・か」

ようやくその場所にたどり着き、俺はその家を見上げてため息をついた。

家といってもそこはアパートで、どの部屋なのか住所に部屋番号までは書かれていなかった。

しかし、すぐに見つけた。303号室、足立――・・・

ピンポーン

間延びしたような音と共に、その部屋の奥からガタツと音がした。中に誰かいるらしい。

俺は急に緊張してしまった。もし本当に足立さんだったらどうしよう・・・別に彼氏でもなんでもないのに、こんなふうに押しかけてしまって迷惑じゃないだろうか。

そう思っている間に、すぐにドアが開かれて・・・・・・・・・・俺は足立さんと露骨に目が合った。

「・・・・・・・・えんちゃん・・」

「・・・・・・・・お久しぶりです」

「ん・・・・・・・・いいよ、中に入って」

あのときからちっとも変わっていない綺麗な彼女は俺を部屋の奥へと誘導した。

.....

意外にもすんなりと入れたことに驚きながら、俺はリビングのソファに座っていた。キッチンには、お茶を淹れる足立さん。コポコポという音が聞こえてくる。

こんなふうに来たけど、これからどうしようか・・・

「どうしてここがわかったの？」

「え・・・あ、バイト先のカードで・・・」

いまいち返事になっていないような気もしたが、それでも通じたらしく足立さんは寂しそうに目を伏せて頷いた。

それから、こっちに來て俺の目の前にマグカップを置いた。

「お礼も言わずに出て行ったことは謝ります。それと、散々利用するだけ利用して迷惑をかけたことも・・・」

「1つ聞いてもいいですか・・・？」

「・・・ん」

俺は1つ深呼吸してからずっと気になっていたことを口にした。

「なんで俺の所に來たんですか？最後の原稿を描くときに・・・」

「

足立さんはしばらくにも言わなかった。それが不安になって、俺は上目遣いに彼女を見た——足立さんは頬を赤くしてただ俯いているだけだった。

「・・・足立さん？」

「――わかってるくせに。どうしてそんなこと訊くの」

「だってわかんないから・・・ほんとに接点と違ってなかったですよ？」

「あつたよ。忘れてると思うけど」

静かに言い放ち、足立さんはため息をついた。

俺はなにも思い当たらずにただ首を傾げるだけだった。

「まあいいよ。とにかく、大学でまたえんちゃんを見たときは驚いた。えんちゃんだったら、私の本性知っても平気だと思った。だから乗り込んだの」

「散々振り回すだけ振り回して黙って出て行きましたけどね」

「そりゃあここにフィールドワークしに行く用事があったから。黙って出て行ったのは、えんちゃんにあっさりと言われれば嫌だったから・・・結構女の子でしょ？」

それこそ俺には意外で、心底驚いた。だけど、決して俺のことが嫌になって出て行ったわけではないことがわかり、少しほっとしたのを感じた。

一方で、足立さんは心底嫌そうな表情をして、俺を見据えた。

「まさかこんな所まで来て、えんちゃんにふられるなんて思わなかったな」

「ふるためにここに来たわけじゃないです・・・・・・迎えに来たんです」

今まで言えなかったこと、俺はようやく言う決心がついた。

「足立さんが好きです」

•
•
•
•
•
•
•
•
•
•

エピソード13 俺と彼女の出会い（前書き）

一応最終回です。

エピソード13 俺と彼女の出会い

翌朝、俺が目を覚ますとすでに足立さんは起きていて、キッチンからいい匂いが漂ってきた。

彼女は俺が目を覚ましたことに気づくと、笑顔でひょっこりと顔を出してきた。

「えーんちゃん！おはよっ」

「お、おはようございます」

「照れてるー！昨日はあんなに愛し合った仲なのにー」

けらけらと笑う足立さんに、俺はぶつと噴き出しそうになるのをなんとかこらえた。

昨日はあれだ・・・エロ漫画家相手にどうしようかと考えたが、結局なにもできずに朝を迎えてしまった。男としてはとてももったいなかったと思う。

朝ごはんは目玉焼きと焼きおにぎり、それから昨日の夕食の残りものだった。

「こんなものしか出せないけど・・・」

「十分だよ。いただきます」

食べながら、俺は時計を気にしていた。今日はバイトの日だ。そろそろ帰らないと間に合わなくなってしまう。だけど、正直ずっとここにいたいと思う気持ちのほうが上だった。

そんな俺に気づいたのか、足立さんは苦笑して言った。

「バイトなんですよ？食べ終わったら早く行きなよ」

「や、うん、そうなんだけど」

「私もフィールドワークが終わったら戻るから。えんちゃんちに」

そこまで言って、足立さんは丁寧に頭を下げた。

「ふつつかものですが、またよろしくお願いします」

「いえ・・・こちらこそよろしく願います」

お互いにそう言い合って、なんだか笑えてきた。

だけど、俺はそれ以上に安心したのを感じている。だってやっと言うことができたから。自分の気持ちを・・・

・・・

1人で先に家に戻ってみたが、やっぱりこの部屋の広さに少し驚いた。足立さんのことは信じているけれど、もし帰ってこなかったらどうしようかと思う。

ふと、そのとき思い出した。そういえば昔これと同じ想いをしたころがあったことに。

あれはいつだっただろうか・・・そうだ、小学校低学年くらいの頃。大好きだったじーちゃんが突然入院することになったときのことだ。

俺は学校帰りに1人で泣いていたことがある。

そのとき、泣いている俺をどついた変な女の子がいたっけ・・・

思い出しながらなんだか笑えてきたが、急にその女の子の喋り方を思い出した。――やたら足立さんに似てないか？

「なんだよ・・・そういうことかよ」

俺はたんすの1番下の引き出しを開けた。その中から迷彩柄のリストバンドを取り出して、久しぶりに腕にはめてみる。

あの女の子を好きになった俺は、今思えば驚異的な行動力で中学校まで行き、その女の子を探し出して告白したのだ。「好きだー!」って。

もちろんあっさりとふられたが、こうしてまた再会できるなんて思ってもみなかった。

「やっと思い出した・・・あの人が足立さんだったんだ」

・・・・・・

その翌日、俺の部屋のインターホンが鳴る。

俺はドアの外にいた人物を出迎える。腕にリストバンドをした状態で。

彼女はそれを見ると一瞬驚いたようだが、すぐにっこりと笑顔になって俺に抱きついてきた。

エピソード13 俺と彼女の出会い（後書き）

こんな拙い小説ですが、読んでくれてありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3514f/>

変態女と俺

2010年10月17日01時30分発行